

小輪性L Aハイブリッドユリ新品種「ピカリ」の育成

大宮 知^{*1} 玉掛 秀人^{*2} 生方 雅男^{*1}

ユリ「ピカリ」は胚珠-胚培養法を利用して、野生種チョウセンヒメユリの小輪性をシンテッポウユリ「ホワイトランサー」に導入した新タイプのL Aハイブリッドユリ品種である。ロンギフローラムハイブリッドを用いた遠縁種間雑種であるL Aハイブリッド品種において、実用品種として小輪性を導入した例は少なく新奇的な品種である。また切花特性の点においても、花形と草姿はシンテッポウユリの形態を持ちながら、鮮やかな花色と小輪性を有し、生育は旺盛で凍結貯蔵球を利用した栽培も容易である。さらに小球開花性に優れ、球周8~10cmの小球根での切花生産が可能であること、一年球の肥大性に優れるため多くの一年球を切花栽培用として利用できることなどから、切花生産における種苗費の低減とともに球根生産での省力・効率化も可能である。

緒 言

切り花用ユリ品種群は大輪で芳香を有するオリエンタルハイブリッド、多様な花色のアジアティックハイブリッド、白色で筒型の花形が特徴のロンギフローラムハイブリッドなどに大別されるが、胚培養などのバイオテクノロジー利用によって従来は困難であった遠縁種間雑種の獲得も可能になり新規的な交配系統も育成されてきた^{2, 5)}。L Aハイブリッドはアジアティックハイブリッドの改良などを目的にテッポウユリ (*Lilium longiflorum* Thumb.) やその園芸品種群であるロンギフローラムハイブリッドとの交配により育成された遠縁種間雑種による品種群であり、光沢感のある多様な花色と優れた生育が特徴で栽培が増加している⁴⁾。

道立農業試験場（現：北海道立総合研究機構農業研究本部）では2003年にアジアティックハイブリッド品種「きたきらり」を育成した¹²⁾。この品種は胚培養を利用して野生種であるチョウセンヒメユリ (*Lilium concolor* Salisb var. *pulchellum* (Fisch.) Regel) の小輪性を導入した新タイプのアジアティックハイブリッド

品種であり、市場の評価も高いことから2006年に新たな花色の小輪品種「きらりゴールド」、「きらりレモン」および「きらりマジック」を育成し、きらりシリーズとして普及を図っている¹³⁾。今後、小輪品種を地域ブランドとして定着させ、生産拡大を効果的に進めるためには、新たな特徴を有する小輪品種の育成も重要と思われることから、花形の改良などを目的としたロンギフローラムハイブリッドとの交配を行った。

育種目標と育成経過

「ピカリ」は胚培養技術を利用した小輪性を有するL Aハイブリッド切り花用ユリ品種の育成を目標として、北海道立中央農業試験場（現：北海道立総合研究機構中央農業試験場）で1998年に上向き咲きで花形・草姿の優れるシンテッポウユリ「ホワイトランサー」(*Lilium* × *formolongi* hort. 'White Lancer') を種子親として、花蕾が小さく生育の早い野生種チョウセンヒメユリを花粉親として交配された（表1，図1）。この交配組合せは通常の交配では種子の獲得が困難であることから、花柱切断受粉法による交配と胚珠-胚培養技術^{1, 3)}を用いて雑種を獲得した。30花に交配し、肥大した子房から697個の胚珠を摘出して培養したところ300個が発芽し、残りの胚珠から201個の胚を摘出して培養した結果、さらに39個が発芽した。それらのうち、正常に生育し鉢上げに至った181個体を1999年に圃場へ定植し個体調査を実施した。2000年に花色・花形や草姿に優れた3個体を一次選抜し、北海道立花・野菜技術センター（現：北

2013年10月31日受理

^{*1} （地独）北海道立総合研究機構花・野菜技術センター、073-0026 滝川市
E-mail: oomiya-tomo@hro.or.jp

^{*2} 同中央農業試験場（現：同中央農業試験場遺伝資源部、073-0013 滝川市）

海道立総合研究機構花・野菜技術センター)において球根の増殖を行った。球根の生産性が高かった1系統を、2002年から「Li-19」の系統名を付して生産力検定試験を実施するとともに、生産力検定試験圃場において外部評価を得るための求評会を実施した。また、2003年には日持ち性試験を行った。

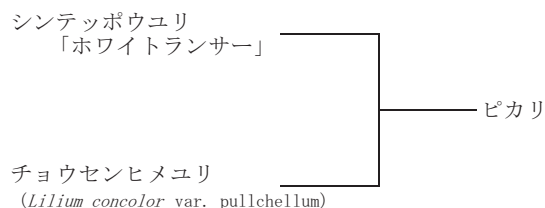


図1 「ピカリ」の系譜

表1 「ピカリ」の育成経過

年次	試験名	供試系統数	個体・系統名	実施場所
1998	交配 胚珠-胚培養	30花 697個 (発芽数 ¹⁾ 339個体)		中央農業試験場
1999	鉢上げ・定植	181個体	98LA1-1	中央農業試験場
2000	開花・一次選抜 増殖性試験	3個体	98LA1-1	中央農業試験場および 花・野菜技術センター
2001	増殖性試験・二次選抜	1系統	98LA1-1	花・野菜技術センター
2002	増殖性試験・生産力検定試験・求評会	1系統	Li-19	花・野菜技術センター
2003	生産力検定試験・求評会	1系統	Li-19	花・野菜技術センター

注1) 胚珠培養のみで発芽した300個体を含む。

特性概要

LAハイブリッドの代表的品種「ロイヤルトリニティー」、小輪性アジアティックハイブリッド「きたきらり」および小輪の野生種チョウセンヒメユリを比較品種として特性を比較した。

1. 生育特性

(1) 早晩性

冷凍貯蔵球を用いた5月定植栽培での採花までの日数(在圃日数)は約62日であり、「ロイヤルトリニティー」や「きたきらり」と同等で、チョウセンヒメユリより約9日長い(表2)。

(2) 草姿等

草丈は「ロイヤルトリニティー」およびチョウセンヒメユリと同程度で「きたきらり」よりやや長い(表3)。茎径は「ロイヤルトリニティー」よりやや細いが、小輪の他2品種より太く十分な硬さを有する。葉枯病の発生は「きたきらり」と同程度認められ、チョウセンヒメユリより軽微であるが「ロイヤルトリニティー」よりやや発生しやすい(表4)。

2. 切花特性

(1) 花容

花弁色は透明感のある明るい鮮橙色で「ロイヤルトリニティー」より濃くわずかな光沢を有する(表5、写真2)。「きたきらり」よりやや淡く斑点はない(表4)。

花形は「きたきらり」のスカシユリ型に対して、テッポウユリとスカシユリの間中型で「ロイヤルトリニティー」と同様である。花径は「きたきらり」よりやや大きいものの、「ロイヤルトリニティー」より明らかに小さい(表3)。花粉は赤橙色で、香りはなくチョウセンヒメユリのような不快臭も有しない。

(2) 花房

花蕾数は球周12~14cmの球根で8.9個、同10~12cmで7.9個、同8~10cmでも5.8個であり、多輪性のチョウセンヒメユリより少ないが、「ロイヤルトリニティー」より明らかに多い(表3、図2)。花房の形は総状で花梗の長さはやや長い、花梗および花の向きがそれぞれ垂直方向に対して鋭角のため、シンテッポウユリのようにコンパクトで箱詰めにも適した花房形状である。しかし、多輪咲きでは花房が大きすぎるため、一般的な切花栽培では球周8~12cmの小球根の利用が適当と思われる。

(3) 茎葉

花房と茎長のバランスは、球周8~12cmの球根では「ロイヤルトリニティー」などと同程度で良好である。しかし同12~14cmの球根では8輪以上の多輪となる花茎が非常に多く(表3)、花房部の割合が高まるためバランスがやや悪い。また止葉下節間長がやや長く、葉形は「きたきらり」の被針形に対して「ロイヤルトリニティー」のような長楕円形であり、葉の着生角度は垂直より約70度の方向である。

表2 開花の早晩性¹⁾

品種名	定植期	採花始め ²⁾	在圃日数 ³⁾	開花始め ⁴⁾	開花期 ⁵⁾
ピカリ	5月25日	7月26日	62	7月28日	7月30日
ロイヤルトリニティー	5月25日	7月26日	62	7月28日	7月30日
きたきらり	5月25日	7月26日	62	7月28日	7月30日
チョウセンヒメユリ	5月25日	7月17日	53	7月19日	7月26日

注1) 「ピカリ」は球周10～12cm, 他は同12～14cmの試験区における, 2002年と2003年の平均値を示した。

2) 開花始めの2日前の日

3) 定植期から採花始めまでの日数

4) 開花株数が全体の10%に達した日

5) 開花株数が全体の50%に達した日

表3 草姿および切り花品質¹⁾

品種名	(球周) ²⁾	草丈 (cm)	茎長 (cm)	花房長 ³⁾ (cm)	花径 (mm)	花蕾数 (個/本)	花梗長 (cm)	止葉下 ⁴⁾ (cm)	茎径 (mm)	葉幅 (mm)	葉長 (cm)
ピカリ	(8-10)	95.8	71.9	23.9	98	5.8	7.5	8.8	5.9	12.1	9.3
	(10-12)	103.5	74.9	28.6	98	7.9	8.6	9.5	6.7	12.2	9.2
	(12-14)	104.9	72.3	32.6	100	8.9	9.6	9.5	6.9	12.4	8.3
ロイヤル トリニティー	(8-10)	86.6	66.8	19.8	179	3.8	7.0	8.8	6.1	17.8	11.1
	(10-12)	92.9	75.6	17.3	168	4.2	7.9	9.3	6.9	17.8	12.0
	(12-14)	103.8	84.2	19.6	165	5.0	5.3	6.7	7.9	17.4	11.2
きたきらり	(10-12)	74.9	61.6	13.3	85	3.7	4.3	3.9	3.8	11.7	6.1
	(12-14)	81.4	66.0	15.4	85	4.6	4.7	4.9	4.2	11.7	6.5
	(14-16)	85.4	67.8	17.6	86	5.9	5.2	5.1	4.7	11.9	6.8
チョウセン	(8-10)	86.4	69.3	17.1	70	9.8	5.7	4.6	4.7	5.0	6.6
ヒメユリ	(10-12)	94.4	75.1	19.3	74	14.8	5.6	5.0	5.7	6.2	6.6
	(12-14)	108.3	83.8	24.5	76	14.6	5.3	6.0	6.0	7.6	9.2

注1) 「ロイヤルトリニティー」の8-10, 10-12および「きたきらり」は2002年, 「ピカリ」の12-14とチョウセンヒメユリの8-10, 10-12は2003年, その他は両年の平均値で示した。

2) 8-10は球周8cm以上10cm未満の球根を表す(以下同様)

3) 花房長: 草丈-茎長

4) 止葉下: 止葉下節間長

表4 その他の特性¹⁾

品種名	球周	内花被			外花被			葉枯病 発生程度 ³⁾
		幅 (cm)	長さ (cm)	斑点数 ²⁾	幅 (cm)	長さ (cm)	斑点数	
ピカリ	(10-12)	3.0	7.3	0	2.4	7.5	0	少
ロイヤルトリニティー	(12-14)	5.5	11.2	0	4.0	11.7	0	微
チョウセンヒメユリ	(12-14)	1.8	4.5	57	1.3	4.7	36	中
きたきらり	(12-14)	2.3	5.4	35	1.8	5.4	15	少

注1) 「きたきらり」は2002年, その他は2002年と2003年の平均値で示した。

2) 花被1枚あたり

3) 葉枯病発生程度: 無-微-少-中-多(観察による評価)

表5 花色の特性

品種名	花卉色			蕾色		斑点色
	基部	地色	裏面			
ピカリ	鮮橙 (1306)	鮮橙 (1306)	明橙 (1305)	明橙 (1305)		—
ロイヤルトリニティー	淡黄橙 (1602)	浅黄橙 (1604)	淡黄橙 (1602)	淡黄橙 (1602)		—
きたきらり	鮮橙 (1306)	鮮橙 (1306)	鮮橙 (1306)	明橙 (1305)		暗灰赤 (0420)
チョウセンヒメユリ	明赤橙 (1005)	明赤橙 (1005)	明赤橙 (1005)	鮮橙 (1306)		赤茶 (0715)

() 内の数字はJHSカラーチャート番号

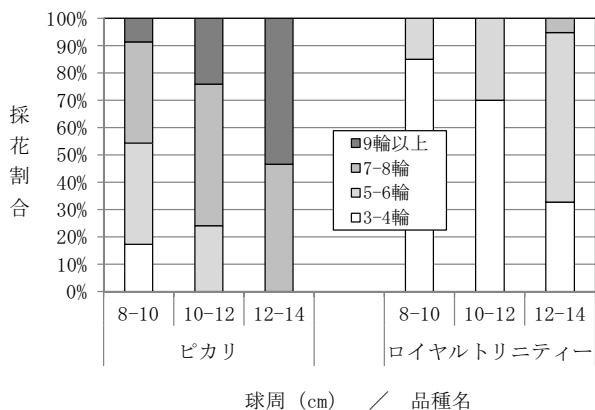


図2 球周別の花茎の花蕾数

3. 日持ち性

20℃・16時間日長・湿度80%条件での1花蕾の観賞日数は5.4日、花蕾数5個の花茎の観賞日数は10.2日である(表6)。「ロイヤルトリニティー」よりやや短い、アジアティックハイブリッドの代表的品種「モナ」と比較したところ同程度であり、実用的なユリの日持ち性は有すると思われる。

4. 増殖性

りん片挿しでは1.4gのりん片1枚から1.5個の子球を形成し、増殖性は比較品種として供試したLAハイブリッド品種やアジアティックハイブリッド品種とほぼ同等で

ある(表7)。養成後の一年球平均重は「ロイヤルトリニティー」や「きたきらり」より大きく、一年球に占める5g以上(球周約8cm以上)の球根の割合は66.6%と高いことから一年球の球根肥大性に優れる。さらに小球開花性が高いため、2年目の養成を要するのは球周8cm未満の一年球に限られ、多くの一年球を切花栽培用として利用することが可能である。

求評会における評価

1. 評価方法

2002年7月24日および2003年7月30日に生産力検定試験圃場において求評会を実施し、アンケートによる意見・感想を聴取した。参加者はユリ生産農家、流通(市場・仲卸・小売り)関係者、育種関係者(個人・民間、地域農業センター)のほか、種苗販売業、農協、農業改良普及センターなどの担当者である。参加人数は2002年が14名、2003年が25名であった。特に比較品種は設けず、表8の評価項目について「良い」・「悪い」・「どちらともいえない」の中から選択し、意見等は任意に記入してもらったものとした。

2. 評価結果

花色についての評価が特に高く、花形や花の大きさ、新奇性などでも良い評価が多く得られた(表8)。特に球周12cm未満の小球根では十分な花蕾数と切花のボリューム、花房の形状が良くコンパクトで箱詰めしやすいこと、切り花の様々な用途への利用が期待できるなどの意見があげられた。

表6 日持ち性試験の結果

品種名	供試本数	1花蕾観賞日数 ¹⁾	5花蕾開花日数 ²⁾	5花蕾観賞日数 ³⁾
ピカリ	6	5.4	4.5	10.2
ロイヤルトリニティー	4	7.2	5.8	13.3
モナ	2	5.3	5.0	10.5

注1) 花蕾1個の開花日数

2) 第1花蕾の開花から第5花蕾の開花までに要する日数

3) 5個の花を有する花茎で第1花蕾の開花から第4花蕾が散るまでの日数

表7 りん片挿しによる一年球の増殖性¹⁾

品種名	品種分類 ²⁾	供試りん片		一年球		占有率 (%)	
				球数 ³⁾	球重 ³⁾		
			枚数	平均重 (g)		平均重 (g)	
ピカリ	LA	小輪	57	1.4	1.5	11.5	8.7
ロイヤルトリニティー	LA		60	2.0	1.7	6.9	4.2
チョウセンヒメユリ	A	小輪	60	1.2	0.9	4.0	4.6
きたきらり	A	小輪	75	1.1	1.9	4.3	2.0
							5g以上
							10g以上

注1) 「ロイヤルトリニティー」は2002年、その他は2000～2002年(いずれもりん片挿し年)の3カ年の平均値で示した。

2) LA: LAハイブリッド A: アジアティックハイブリッド(チョウセンヒメユリを含む)

3) りん片1枚あたり

表8 求評会における評価

評価項目		2002年	2003年 ²⁾
花色 ¹⁾	良い	78.6	84.0 (32.0)
	悪い	0.0	4.0
	どちらともいえない	21.4	12.0
花形 ¹⁾	良い	78.6	72.2 (12.0)
	悪い	0.0	4.0
	どちらともいえない	21.4	24.0
花の大きさ	良い	—	76.0 (4.0)
	悪い	—	4.0
	どちらともいえない	—	20.0
全体の草姿	良い	71.4	52.0 (12.0)
	悪い	0.0	8.0
	どちらともいえない	28.6	40.0
新奇性	良い	71.4	68.0 (4.0)
	悪い	0.0	12.0
	どちらともいえない	28.6	20.0
使いやすさ	良い	85.7	56.0 (4.0)
	悪い	0.0	4.0
	どちらともいえない	14.3	40.0
総合評価	特に良い	7.1	—
	良い	78.6	—
	悪い	0.0	—
	どちらともいえない	14.3	—

注1) 2002年は「花色・花形」として評価

単位：%

2) () 内は「特に良い」とした人の内数

栽培適地および栽培上の注意

全道のユリ栽培（施設栽培）地域に適応する。また、本品種の栽培では次の点に留意する必要がある。①凍結貯蔵球を利用した5月定植作型での成績であり、長期抑制および促成作型については未検討である。②多輪性が強いいため大球の使用は避け、球周8～10cm（平均花蕾数5～7個）または10～12cm（同7～8個）の球根を使用する。また、球根生産では球周8～12cmの一年球を出荷し、8cm未満の極小球のみ2年目の養成を行う。③葉枯病がやや発生しやすいので、発生動向に注意し、アジアティックハイブリッド品種に準じた適切な防除を行う。

論 議

「ピカリ」はロングフローラムハイブリッドのシンテッポウユリとアジアティックハイブリッドの交配親の一つとされるチョウセンヒメユリとを交配したL Aハイブリッド品種である。花形と草姿はシンテッポウユリの形態を持ちながら、鮮やかな色と小輪性を有し、小さな球根を用いても花蕾数が多いなど生育は旺盛で、抑制作型で行われる凍結貯蔵球根を利用した栽培も、貯蔵後の障害等は認められず容易である。ロングフローラムハイブリッドは、先述したようにテッポウユリとその近縁種との交配によって育成され、白色で特徴的な花形の品種群であ

り¹⁵⁾、遠縁種との交配親和性が比較的高いことから胚培養等を利用して様々な種間雑種が育成されている。特にシンテッポウユリは播種から1年で開花する生育の早さと上向き咲きの優れた草姿から、栽培品種としてだけでなく有用な交配親としても利用されている^{6, 7, 9, 11, 16)}。しかし、花粉親として利用されているのはアジアティックハイブリッドや大輪のオリエンタルハイブリッドなどが多く、L Aハイブリッド品種として小輪性を導入した例は非常に少なく、「ピカリ」は新奇的な品種である。さらに小球開花性を有し、一般的には切り花栽培への利用に適さない、りん片挿しによる増殖1年目の小球根の利用が可能である。栗坂⁶⁾はシンテッポウユリとアジアティックハイブリッドとの交雑で得られた「愛媛農試FL1号」がアジアティックハイブリッド品種よりも小球開花性に優れ、球周8.8～12.6cmの球根でも花蕾数が平均2.1個であるとしている。「ピカリ」でも同様の小球開花性が認められたが、球周8～10cmの球根で平均5.8輪開花して、L Aハイブリッドである「ロイヤルトリニティー」と比較しても花蕾数が明らかに多かった。これは「ピカリ」が小球開花性の高いL Aハイブリッドの中でも、多輪性のチョウセンヒメユリを交配に用いていることによると推測され、小球根が切り花栽培に利用できる理由と考えられた。一方で、球周12～14cmの球根では全ての花茎が7～8輪規格以上で9輪以上規格の割合も高く、花房長が30cm以上にもなり草姿のバランスがやや悪くなる傾向が認められた。求評会においても多輪過ぎる花茎についての指摘があり、草姿や切り花の使いやすさについて評価が分かれる一因とも思われた。従って、本品種の小輪で整った草姿や、旺盛な生育と高い小球開花性を活かすために、切り花生産に使用する球根サイズは、球周8～10cmまたは10～12cmの小球根が適していると考えられた。

また、「ピカリ」は球根生産での一年球の肥大性に優れる有用な特徴を持つ。岡田ら¹⁰⁾は、3倍体L Aハイブリッドユリ「ゆうこの初恋」が5輪開花するための球根重は約20gであるが、りん片増殖でアジアティックハイブリッド品種に比べ球根肥大率が高いことから、1年以内に開花球を養成することが可能としている。「ピカリ」では球根重別の開花輪数については未検討であるが、「ゆうこの初恋」と同様、りん片増殖での球根肥大性に優れ、一年球に占める5g以上の球根の割合は66.6%であった。5gの球根を球周に置き換えると約8cmであったことから、6割以上の一年球が開花球であると考えられ、切り花生産に利用できる。このことにより、従来2年を要していた球根生産が一部ではあるが1年に短縮され、短期間での増殖と省力化、またそれらによる種苗費の低減など、ユリ生産における様々なコスト削減が期待

できる。今後はりん片挿しの時期を繰り上げるなど、球根生産技術についても検討を行い、一年球の利用性向上を図ることが必要と考えられる。

光永ら⁸⁾は、シンテッポウユリとアジアティックハイブリッドとを交配したユリ品種育成の中で、種苗費低減を目的としりん片苗栽培適性による選抜を行い、その特性を明らかにしている。りん片苗栽培とは、りん片挿しで形成された子球を圃場に植えて当年中に採花する栽培法で、生育が早いシンテッポウユリで行われてきた。同者らの報告では「アプリコットマリッジ」など6品種について検討し、子球の直径が5 mm以下の小さな苗でも抽台し、約3輪以上開花する特性を有しており非常に興味深い。気候の異なる本道においてそのまま適用するのは難しいが、大宮ら¹⁴⁾が「ピカリ」においてりん片苗栽培を試みたところ、栽培条件によって抽台率や生育日数、花蕾数などが変化していた。しかし、この栽培法による開花期が本道の主要な出荷期である夏秋期となる可能性も示唆され、開花調節のための球根を冷凍貯蔵する施設も不要であるなど、普及場面でのメリットが期待できることから今後の検討が必要であると思われる。

以上のように、新品種「ピカリ」はシンテッポウユリにチョウセンヒメユリを交配して小輪性を導入した新タイプのLAハイブリッドユリである。花色や草姿など切り花や生育の特性に優れ、球根の生産性などにも有望な点が認められたことから、きらりシリーズとともに本道のオリジナル小輪性ユリ品種群の一翼を担うものとして今後の普及が期待される。

摘 要

付表1 育成担当者

担当者名	担当年度
玉掛 秀人	1998～2000
大宮 知	2000～2003
生方 雅男	2000～2003

引用文献

- 1) 浅野義人. ユリの遠縁種間交雑に関する研究 (第1報). 園芸学会雑誌. 46(1), 59-65 (1977)
- 2) 浅野義人. ユリの遠縁種間交雑に関する研究 (第3報). 園芸学会雑誌. 47(3), 401-414 (1978)
- 3) 浅野義人. 日本のユリ 原種とその園芸種. 清水基夫編. 誠文堂新光社, 1987. p.112-125.
- 4) 今西英雄. ユリをつくりこなす. 開花調節と高品質栽培の実際. 農文協, 東京, 2006, 256p
- 5) 國重正昭. 花専科 育種と栽培 ユリ. 誠文堂新光社, 1993, 261p
- 6) 栗坂信之. ユリ新品種「愛媛農試FL1号」の育成と特性. 愛媛県農林水産研究所報告. 2, 7-12 (2010)
- 7) 松本理, 岡藤由美子, 光永拓司, 中村建夫. 胚珠培養によるユリ新品種「アプリコットマリッジ」の育成. 山口県農業試験場研究報告. 49, 1-4 (1998)
- 8) 光永拓司, 尾関仁志, 岡藤由美子, 山本雄慈, 松本理. 胚珠培養によるユリ新品種マリッジシリーズの育成. 山口県農業試験場研究報告. 53, 50-58 (2002)
- 9) 森本泰史, 土岐昌弘, 村西久美, 永宗正規, 鴻野信輔. 胚培養によるユリ新品種「アフロ」の育成. 岡山県農業総合センター農業試験場研究報告. 20, 47-49 (2002)
- 10) 岡田昌久, 新田益男, 松本満夫. 3倍体LAハイブリッドユリ品種「ゆうこの初恋」の育成. 高知県農業技術センター研究報告. 10, 27-32 (2001)
- 11) 岡崎桂一, 馬田雄史, 浦島修, 川田穰一, 国重正昭, 村上欣治. 胚培養によるテッポウユリ, シンテッポウユリとオトメユリ, ササユリの種間雑種. 園芸学会雑誌. 60(4), 997-1001 (1992)
- 12) 大宮知, 玉掛秀人, 筒井佐喜雄, 菊地治己, 生方雅男, 布目暁洋. 小輪性ユリ新品種「きたきらり」の育成. 北海道立農業試験場集報. 87, 1-8 (2004)
- 13) 大宮知, 玉掛秀人, 生方雅男. 小輪性ユリ新品種きらりシリーズ「きらりゴールド」, 「きらりレモン」および「きらりマジック」の育成. 北海道立農業試験場集報. 94, 41-53 (2009)
- 14) 大宮知, 生方雅男. ユリ「Li-19」におけるりん片小球抑制栽培の試み. 北海道園芸研究談話会報. 38, 70-71 (2005)
- 15) 清水基夫. 日本のユリ 原種とその園芸種. 清水基夫編. 誠文堂新光社, 東京, 1987. p.47-52.
- 16) 鈴木誠一, 瀬尾直美. ユリの新品種「みやぎFL5号」・「みやぎFL6号」の育成経過とその特性. 宮城県農業・園芸総合研究所研究報告. 79, 15-29 (2010)



写真1 (左から)「ホワイトランサー」,「ピカリ」, チョウセンヒメユリの草姿



写真2 (左から)「ホワイトランサー」,「ピカリ」, チョウセンヒメユリの花形



写真3 (左から) 比較品種「ロイヤルトリニティー」
および「きたきらり」の草姿



写真4 「ピカリ」を使ったフラワー
アレンジメント

A New Small-Flowered Cultivar of the LA Hybrid Lily, 'Pikari'

Tomo OOMIYA^{*1}, Hideto TAMAGAKE^{*2}, and Masao UBUKATA^{*1}

Summary

A new cultivar of the LA hybrid lily, 'Pikari', was produced by cut-style pollination between the Longiflorum hybrid lily 'White Lancer' and *Lilium concolor* var. *pulchellum*, and subsequent ovule-embryo culture. Horticultural characteristics of 'Pikari' are as follows. It takes about 65 days to flower when chilled bulbs are planted in May. The flower form is similar to another LA hybrid lily 'Royal Trinity'. The flower is about 10 cm in diameter, and the perianth is vivid-orange in color and has no spots. The scape height is about 100 cm, and the flowers attach near-vertically to the stem as 'White Lancer'. The raceme inflorescence is compact, and thus 'Pikari' may be suitable for flower arrangement in domestic uses and small bouquet. 'Pikari' produces many small flowers even when small bulbs are planted. Bulbs of 8 cm or more in circumference were necessary for producing around 5 flowers per scape. Bulbs of 10 cm or more in circumference produced around 7 flowers per scape. 'Pikari' can be propagated very effectively by scaling. After one year of growth after scaling, about 67% of bulbs were 8 cm or more in circumference and usable for cut flower production.

^{*1} Hokkaido Ornamental Plants and Vegetables Research Center, Takikawa, 073-0026 Japan
E-mail: oomiya-tomo@hro.or.jp

^{*2} Hokkaido Central Agricultural Experiment Station, Naganuma, 069-1395 Japan) Present; Hokkaido Central Agricultural Experiment Station, Plant Genetic Resources Section, Takikawa, 073-0013 Japan)